

# 東広島医療センター 呼吸器グループ



## Updated Topics and Report (24<sup>th</sup> issue)

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

東広島医療センターの呼吸器グループは、広島中央医療圏において診療に携わっておられる先生方へ定期的に“**Updated Topics and Report**”をお届けしております。

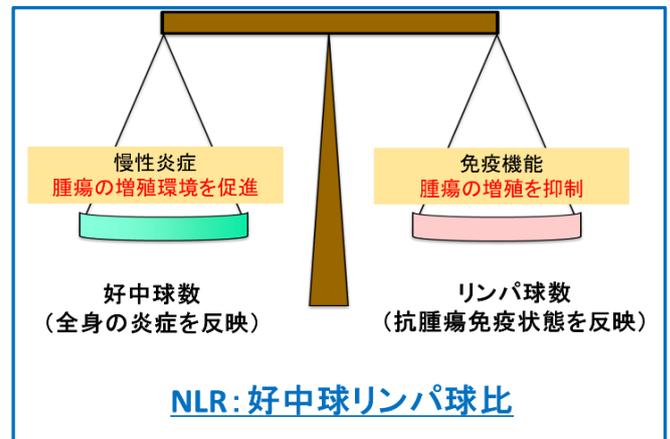
当グループは地域医療機関の先生方から多くの患者さんをご紹介頂き診療実績を積み上げてまいりました。グループ全体として、先生方や地域住民に信頼していただける医療を今後も提供できるように診療レベルの向上に努めていくとともに、情報発信も行っていきたいと考えております。ご多忙中のところと存じますが、本誌を診療の合間などにお読みいただければ幸いです。

本号は、『**当院が研究代表施設として国立病院機構の病院群による多施設共同研究が開始**』される件のご報告、ならびに『**円形無気肺が肺膿瘍に至った1例**』の症例報告です。

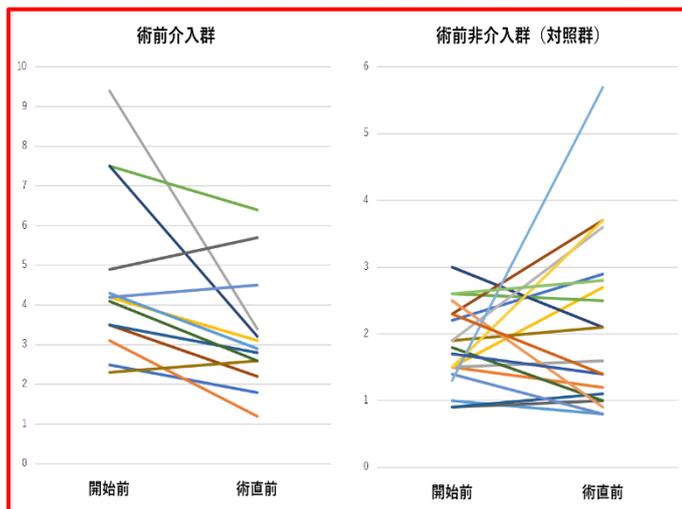
2025年1月

### ▶ 当院が研究代表施設として国立病院機構の病院群による多施設共同研究が開始

通常の血液検査で簡単に測定可能な、好中球数とリンパ球数の比（Neutrophil Lymphocyte Ratio: NLR）は、好中球数が全身の炎症を反映し腫瘍の増殖環境を促進させ、リンパ球が腫瘍に対する免疫反応により腫瘍の増殖を抑制するため、**腫瘍促進環境と抗腫瘍免疫状態のバランスを反映する指標**とされています（右図）。肺癌を含めた、いくつかの癌腫で、NLRが予後と関連するとの報告が散見されます。今回、肺癌で手術を受ける患者においてNLRが術後の合併症や長期予後と関連するかについて、多施設による大規模な前向き観察研究を当院が研究代表者として開始する事になりました。



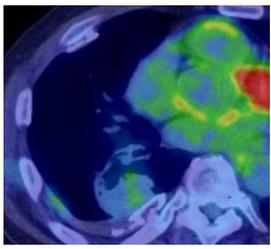
「術前の全身状態」は術後の合併症や予後と関連することから、さまざまな術前の介入（リハビリテーション、栄養療法、補完療法など）が、施設毎の考え方で行われている現状があります。



術前待機期間中のさまざまな介入によりNLR等の免疫指標が変化するかどうか、一方、術前の待機期間に何も介入しない場合、全身状態（NLR等の指標）の悪化がどの程度生じうるか、自験例の結果（左図）をもとに、多数症例で評価し、さらにその変化がもたらす影響について検討することは極めて重要と考えられます。

## ▶ 円形無気肺が肺膿瘍に至った1例

**(症例)** 60代の男性。過去に肺腫瘍疑いで紹介歴あり。その際、CTにて気管支血管束を引き込んだ索状影の伸びだし (comet tail sign) を認め **(右**



**上図)**、PET 検査で明らかな異常集積もなく **(左上図)**、右肺下葉の円形無気肺と診断された。紹介医で経過観察されていたが、数日前から発熱があり近医を受診し、インフルエンザ・covid19の感染は検査にて否定された。その後自宅療養にて一旦解熱したが、2週間後に再度発熱し、CT検査で肺膿瘍が疑われ当院へ紹介となった。



**(検査所見)** WBC : 17000/ $\mu$ L, CRP : 9.49mg/dL と血液学的炎症所見が認めら、胸部単純 X-p 検査で右中肺野に広く浸潤影があり **(左中図)**、胸部 CT で過去に右肺下葉の円形無気肺と判断されていた腫瘤様陰影が明らかに増大していた **(右中図)**。また腫瘤内部には、膿瘍腔が疑われる低吸収域やガス像をともなっていた。



**(呼吸器グループカンファレンス)** 円形無気肺部に感染が生じ、肺膿瘍化していると判断。腫瘍性病変などが混在している可能性も考えられたが、まずは抗生物質 (TAZ/PIPC) 投与を行うこととし、改善傾向に乏しい場合は、診断と治療を兼ねた手術も考慮する方針となった。

**(臨床経過)** 抗生物質投与にて、徐々に血液学的炎症所見は改善していった。治療開始時には



38°C台の発熱があつたが徐々に解熱傾向となり、胸部単純 X-p 検査上も右肺野の浸潤陰影は改善していった **(左下図)**。2週間の入院抗生剤治療後に退院し外来経過観察となった。3か月後の CT 検査で腫瘤様陰影は縮小し、炎症が生じる前と同程度になっていた **(右下図)**。



**(考察)** 円形無気肺とは、画像上腫瘤影を呈する肺末梢の限局性無気肺で、下葉に生じることがほとんどであり、原因としては石綿暴露歴などによる胸膜炎・胸水貯留に反応して胸膜が収縮し折れ曲がり折り込まれることにより起こると報告されている。時に悪性腫瘍との鑑別が困難な症例も存在するが、本例は画像上の特徴および下葉に発生していることから円形無気肺として経過観察されていた。

なお本例のように円形無気肺に肺膿瘍を合併した報告例は医学中央雑誌で検索する限り、過去に1例の報告 (会議録) を認めるのみであった。今後も腫瘍性病変の混在ならびに炎症の再発を考慮に入れながら注意深く経過観察を行っていく必要があると考えられた。

東広島医療センター呼吸器グループは、最高レベルの医療を提供できるよう、充実したスタッフによる最良の診療を心掛けてまいります。また**原則としてご紹介いただいた患者さんは、ご紹介元の先生に逆紹介するよう心がけております**。東広島医療センター呼吸器グループに対するご意見・ご不満・ご質問・ご感想、またお知りになりたい情報等ございましたら担当医もしくは地域連携室までご連絡ください (地域連携室 FAX : 082-493-6488)。